



本時での英語表現が、難しいものでなく身近な自己紹介の表現であったため、どの子にとっても抵抗なく取り組めた。また、手だてとして用意した写真シールやホルダーそして学習カードを活用しながら、時間いっぱい相手を替えてインタビュー活動を行うことができた。

授業の終末で、中学生から「ほんとにおもしろかった。」「アイコンタクトもちゃんとできた。」等、小学生とうまくコミュニケーションをとることができたという感想が聞かれた。

(2) 事例から明らかになったこと

○初めての試みであったが、小中学生ともに意欲的に活動しており、コミュニケーションを図ろうとする態度を育てるという面では、成功であった。間違いを気にして小さな声になりがちな生徒も、楽しい雰囲気の中、大きな声で話しかけるなど積極的な様子が見られた。これからの小中の連携の形として良いのではないか。

○本時は、英語を用いてはいたが総合的な学習であり、異年齢間の交流の機会でもあり、大きな意味で人間性を育てる場にもなり得る。

○お互いの良い面（特性）を生かしつつ交流することができ、英語表現を通して自分を表す機会になった。

□中学校の英語という教科の面から考えると、扱う英語表現が易しすぎるため中学生の側のメリットが限られてしまう。また中学は教科担任制であり、時間の融通が難しく、打ち合わせも時間がかかるので教師の負担が大きい。

□小布施町のように一町一校である場合はよいが、複数の小学校から集まる中学では足並みをそろえることが難しいのではないか。

(3) 講師指導

中1ギャップの解消と小中連携という面から、中学生が小学生に教えたり一緒に学習することには意味がある。本時では、中学生が英語を話さなければならないという必要感があつた。小学生には聞くことを主体とし強制しない雰囲気作りが必要である。積極性やアイコンタクト、スマイル、声量などコミュニケーション態度の育成を図ることが大切になる。小中の教師同士の交流も大切で参観するだけでも交流になる。しかし市町村の実態が異なるので、工夫していかなければならない。

本時の授業のように、思い切ってやってみるといろいろと見えてくるので、探りながら手がかりとしていきたい。

4 来年度への課題

○引き続き小中の連携の方法を考えていく。互いに授業を見合うことで、小学校の外国語活動で、大切な「コミュニケーション態度の育成」が中学校での英語にどのようなつながっていくのかを、また中学校では、「聞くこと・話すこと」を中心とした小学校の外国語活動の特徴を理解する機会としていきたい。

○ ALTとの協力のしかたと英語ノートの活用方法について情報交換しながら考えていく。